

---

# 儻く強く

紗夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

儚く強く

### 【Zコード】

Z6284C

### 【作者名】

紗夜

### 【あらすじ】

小学生にして訳ありで一人暮らしをしていた一人の少年。そんな彼は、暗闇の中にも光を見つける。友達という、光を……。

## 第一話　（前書き）

中学から高校にかけての物語を書きたいと思います。完結するか分かりませんし、文章もかなり拙いと思います。それでも読んでいただける方は、よろしくお願いします。m(—)m

## 第一話

うんざりだった。

この世の中も。

周りの人間も。

消えて無くなりたいと、何度願つただろうか。

その度に、それはいけないと思った。

家族の為にも、生きようと誓つた。

生きなければ、いけないと…。

### 第一話

季節は春。

とは言つても、まだ初春の肌寒い時期。

俺は寒がりなものあり、Tシャツ、Yシャツ、薄めのカーディガンの上に、更に分厚いカーディガンを重ね着していた。

たつた今、卒業式用のブレザーを制服店から借りて来たところだ。

3月14日。

それが卒業式の日。

今のところ晴れの予定。

・桜は咲くのかな。

ピーンボーン

ふと、間抜けな呼び鈴の音がする。

時刻は午後5時23分。

家を出たのが4時半、制服店まで15分程。

まるで俺が帰つて来るのを見計らつたような時間に来るは、あいつ以外にいない。

今来た廊下をまた戻り、玄関に着く。

「成瀬です。誰ですか?」

そこに誰が立っているか分かり切つてはいるが、念のためだ。

「俺

「だから誰ですか？」

「…石崎 亮介」

名前を確認し、鍵を開けてやる。

訪問者はドアを開け、拗ねた顔で入つて來た。

「誰だか分かつて名前聞いたろ」

声まで拗ねている。

「一応。無用心だから」

「…そうかなあ」

まだ不満足らしいが、面倒なので無視。奥に歩く。

「なあ、棗」

「なんだよ？」

「冷たい…」

「いつもの事だろ」

冷たくあじりついと、また拗ねた顔をする。

「あの“いつも”が続けばいいけどなあ」

「ははっ、何だそりや」

「だつてお前、卒業だせへ、今田だい田。カウンターダウンが始まつて  
るー」

妙に凄みの利いた声で囁ひるので、笑いが込み上げてきた。

「回じ中学じやんー」

「でもよお……」と葉を濁す亮介。

そして、眞まやかしつに話だす。

「なあ、あの、お前のお父さんは……卒業だ、帰つて来んのか?  
「来ない」  
「じゃあ入学だは……」  
「来ねえよ、一生。今頃、どうかで余生楽しんでんじゃねえの?」  
「…………」

亮介は黙り込む。

「……悪い。心配してくれたんだろ?」

「……いや、ね。俺も悪かったよ。命日、明日だっけ……。ストレス溜め込む時期だよなあ」

命日。母と姉の、命日。

3月7日。

思いだしたくもない、忌々しい記憶が頭を掠める。

「嫌な事思い出させんなよ……」

「うん、『めん……』」

それでも俺はなんとなく、亮介の気兼ねしないストレートな話し方が好きだった。

亮介は幼稚園から一緒に、いわゆる幼なじみ。

小学校3年の時に、俺の家族がいなくなつたことを知っている数少ない人物の1人だ。

「亮介、俺の家族のことは……」「分かってる。誰にも言わないよ

「サンキュー……」

「お前のペースで、お前が信じられる奴だけに話せばいいさ」

「……ああ」

それからその話は一切出さずに、他愛もない話に盛り上がり、時刻は7時を回った。

再び間抜けな呼び鈴が鳴る。

「何、誰？」

「さあ…」

亮介の質問に、心当たりの無い俺は歯切れの悪い返事をした。

玄関まで行つて、声を掛ける。

「誰ですか？」

「望

端的な答え。でも、誰だか分かる。

「ちょっと待つて」

すぐに鍵を開け、招き入れる。

望こと三森 望は玄関に亮介の靴を発見したらしい。  
みつもりのやま

「あれ？誰のだろ…」

と、何回も疑問符を浮かべている。

「！…分かつたあ、亮介だ！」

大声を出して駆け出す三森を、いつものペースで歩く俺が追つ。

リビングから賑やかな会話が聞こえ始めた。

「三森じゃん。何しに来たの？」

「勉強教えてもらおつかな、って」

「棗、頭いーからな」

「亮介はバカだよねー。『ナツメ』って書けないでしょ。『棗』つ

て書くんだよ」

「…知ってるよ…」

「ウツソだあ～」

さすが三森。自他共に認めるハイテンションガール。場が一気に盛り上がった。

「勉強くらい自分でやれよ」

会話に加わる俺。

「酷い！棗、冷たいよおー」

「いつもの事だろ」

「あ、俺も言われた」

「亮介うるさい」

「…酷いのお前じゃね？」

結局、勉強を教える事になり、もう終わらせた宿題を2回やる羽田になつた。

「もう9時なるけど。こいつ帰んの？お前らは

『飯も風呂もまだのハズなのに、こつまでも家に面りられると困る。

「じゃあ、俺帰るよ」  
「私はもうちよつと…」  
『お前も帰れ』  
「ハモんなくても…」

午後9時4分。

平穏を取り戻した部屋は、清々しくもあり、寂しくもあった。

風呂に入り、出る。

濡れた髪など気にせず、カーペットに寝転ぶ。

「…明日は明日か」

亮介に言われた事を、声に出して再確認する。

気まぐれで独り言を言つ癖がついてしまったのは、もう3年位になる一人暮らしのせいだろう。

そんな事を考えて、明日の準備をした後、床に就いた。

また、新しい朝を迎える。肌寒い朝に慣れる事はなく、この季節は嫌いなままだ。

あの事故の日から…。

「ふわああ…」



## 第一話

俺には、事故の記憶が無い。

だからと書いて、悲しくない訳ない。

それまでの記憶ならしつかりとある。

家族がいないのだ。

自分の知らない時に、家族がいなくなってしまったのだ。

いや、正確には一人いる。

どうしようもない、今生きているかも分からない、親父が。

## 第一話

寝巻きから普段着に着替えて、朝飯の準備に向かう。

飯を作るのは結構得意で、小学生のそれとはレベルが違うと思つ。

これは自惚れではなく、実際に亮介や望に言われた事だ。

でも、命田にはいつも手早く済ませる習慣があるので、例の如く朝はトースター一枚とココア一杯。

「今年も桃の花にしようかな…」

### 桃の花

母も姉も好きだった花。

季節もピッタリだし、いつ見ても綺麗だと思える。

まあ事故が影響してるんだろうけど。

「…いってきます」

誰かが居るはずもない部屋にて、挨拶を告げる。

「あ～あ、今日は棗休みかぁ…」

わざわざからり回田の発言だぞ。なんとも諦めの壁。

「…ホント好きなんだな。棗の事

「ここをつこで出した煙草に吸は…

「ええ…。なんだ事…、いや、あるナビーでも呑み合ひ事か…。亮介…」

「……」

「うん。いこりアクション。

でもね。監査付いてますよ…あなたが棗を好きなのさ。

「ああ…。やっぱしあげてひじやんかあ…。」

「……」

だからバレてしまつて。  
黙つておれますが。

「こやああ…。」  
「うひセーフ…。」

そらから植えられたねえ…。オイ…

「だつてえ…」

「望はいちいち反応デケホんだよー。」

「ふーんっだ！亮介には分かんないもんねーー！」

「ハイハイ……」

俺のマンションから徒歩で20分程の所に、母と姉の眠る靈園はある。

この古い靈園の中、墓は奥の方なので、辿り着くとも一苦労だ。

「…また今年も来たよ。母さん、姉貴」

「待つててな。今綺麗にしてやつから…」

毎年、ここへ来て最初にする事が、墓の掃除。

3年目となるともう慣例になつた。

手早く終了。

花を添える。もちろん桃の花。

1年間に起きたことを、報告する。

「…じゃあな、また来年。必ず来るよ」

別れを告げる。あつわつしてるように見えるかもしれないが、これ以上ここにいると泣いてしまうくなつてしまつ。

「今日の晩飯は何かな…」

『氣を反らすフリをする俺が更に情けなく思える。

でも、今はこうする事しかできない。

今だけは…。

## 第三話

「ふわあ…」

はつせり言つて、卒業式はたるい。

しかも、去年の卒業生は男子まで大泣きする程感動的だつたのに、今年、俺らの代は泣いてる奴がない位だ。

まるで、泣いてる方がおかしいみたいに。

「…………あるから…………です。…………は…………なので……」

校長の話が始まつて15分経過。

一向に止まる事の無むつな無駄話は、俺の耳を通り過ぎる。

悲しい事ではあるが、この学校に未練とかそんなのは一切無くて。

もつ少し、溶け込んでない訳じや良かつたか。

でも別に溶け込んでない訳じや…。

ほんやうと話をやつして30分が経とつした時、やつと校長

が長い長い話を終えた。

卒業証書授与式とかいつのも終わって、後は帰るだけか。

つて時に：

「棗ー今からお前ん家で打ち上げだ！」

また訳の分からん事を…。

「亮介、お前はバカか？何の打ち上げだよ」

「卒業式の」

「普通、感動的なモノなんだから、盛り上がり騒ぐなんて…」

「全然感動的じゃないからいいでしょ」

結局、強引に家へ、亮介と何故か望まで行く事に。

その途中の帰り道

「望？」

通りすがつた男女4人の1人の女子が私に話し掛けて来た。

「由<sup>ゆ</sup>宇<sup>う</sup>…？」

それは、はつきりと見覚えのある顔で。

「やつぱりー望じやーん！」

「久しふりー！」

2人でおしゃあしゃあ言つてると、不思議そうに訊ねてくる嘛。

「知り合<sup>い</sup>い？」

そうだ！紹介しなきや！

「あのねー！前の塾で一緒にいた友達ー。」

「ふうん…」

「でね、神山由<sup>ゆ</sup>宇<sup>う</sup>ちゃんテス！」

由[手]が頭をトダガるのを見て、棗も軽くトダガる。

「あー…、神山さん?」

「はー」

「南中?」

「え?」

南中とは、私達が進む中学校の名前で、止戻には市立南中学校。

「うん」

「へー。じゃあ、これから時間ある?」

「え?」

何故に時間?  
はつーそつかあー

「今から…  
打ち上げ来なよー」「…………」

なーんか微妙な雰囲気のはなんで…?

「望、人の言葉を遮るな」

「え? なんで?」

「はあ…。何でもない。まあそゆことなんで、来る?」

答えを待つ棗。

後ろにいた3人に聞く由宇。

そして…

「言つていいんですか?」

「もちろん!」

棗より先に答えて叩かれたのは言つまでもない。

彼等の打ち上げ といつても家で遊ぶだけらしい をする場所は、  
ホントは最初に誘おうとした、成瀬 棗といつ男子の家だった。

私、神山 由宇にとつて男子の家は初体験な訳で、緊張があああ…

「神山さん?」

「ふえあ？」

あ、変な声出しちゃった。

と思つたら成瀬くんが吹き出した。

「へへへ……っ悪い。入っていいよ」

「ひ…ハズい……。

「お邪魔します…」

私は静かに、その扉の中に入つて行つた。

『おお～～～～～！』

私達は一斉に声を上げた。

「えーっと、じゃあ自己紹介から！」

「全員、南中なら名前と入りたい部活と好きな物みたいなのは？」

「いいね！亮介！」

亮介と呼ばれた彼は“じゃ、俺から”と小さく言つて自己紹介を始めた。

「石崎 亮介です！絶対水泳部！んで、好きな事も水泳

結構、背が高めの石崎くんは160ちょいかな。  
髪は茶髪っぽいし、何げにイケメンかも。

「あ、じゃ、俺。成瀬 粂ね。同じく水泳部で好きな事は寝る事と  
音楽聞くことかな」

さつきも思つたけど、カッコいい。なんて言つか…ジャニーズ系?  
背は160…はないか。158くらい?

「はあ～い一次あたし！三森 望！バスケ部希望で好きな人は…秘  
密」

相変わらずの望は、まだ小さいな…。150ちょっとしかないん  
じゃ…。

髪も茶髪のままだし。

「次だれ？」

ふいに質問が…

「うひ、神山由宇。バレー部でバイクが好きかな」

ちなみに私は、155のちょっと高め?髪は長めのストレートです!

「じゃあ私も。泉笑満捺で、テニス部かな?好きな物は特になし」

最近150になつたらしい笑満捺はかなりマイペースなんだな。

「俺は加地琉衣。両方バスケ」

琉衣も結構カッコいい系。私と背同じだけど。

「ウチは藤木杏子。杏子いーよ!部活は決まってないけど、好きなのは買い物でーす!」

杏子は私より小さくて笑満捺より大きい。

彼女もまた茶髪。

「ほんじゃ終わった事だし。遊ぶぜー。」

石崎くんの言葉で皆一斉に遊び始めた。  
出遅れた私は輪には入りにくくて…。

「おーー！俺、メシ買つて来るけど、何かいる？」

口々に言いだす皆の注文を、ケータイに打ち込む成瀬くん。

「神山さんは？」  
「えつ？私？」  
「欲しいモノある？」  
「んー…、あ…」  
「何？」  
「私も一緒に行くよ！」

一瞬、驚いた顔をして

「サンキュー 助かる」

「ほんりり笑うその顔に、私は一目惚れした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6284c/>

---

僕く強く

2010年10月30日21時18分発行